グリフィスの残したメモ“Students”（学生名簿）について　―グリフィスの福井時代の学生たち―

沖　久也

はじめに

W・E・グリフィスは、福井藩の藩校明新館で主として化学、物理を教えた御雇米国人教師である。その福井滞在期間は一八七一年三月四日（明治四年一月一四日）から一八七二年一月二二日（明治四年一二月一三日）までの約一一カ月間である。彼はこの間の日記と多くの手紙を姉のマーガレット宛てに送っている。

筆者は先にこの福井日記に五回以上出てくる福井人の同定を試み、本誌に「グリフィスの福井日記中の福井人の同定について」という題で報告した。[1] この時は日記に五回以上出てくる福井人と限定したために、藩関係者などが多く、学生は数少ない人しか取り上げていない。

今回、筆者は福井大学総合図書館のグリフィスコレクション中にグリフィスの自筆メモで「Students」[2]なるものがあることを図書館の安野辰己氏より知らされた（以下、単にメモと略す）。メモの存在は「グリフィスの福井日記の“Misaki”（三崎）は誰か？」[3]で触れたが、その詳しい内容については報告していない。

メモにはグリフィスが自筆で五〇名ほどの学生の姓を記しており、これほど多くの学生名が分かるものは他にはないので　グリフィスの福井時代の弟子にどのような人物がいたかを知る基礎的な史料として重要と考え、報告することにした。ただし、メモには大部分が学生の姓や呼び名が英語で記されているだけである。そのため、学生の同定を行う必要があるが、上記の「グリフィスの福井日記中の福井人の同定について」（以下は「福井人の同定」と略記）の時とは違い、学生の多くはまだ若年であり、藩の関係の史料にはほとんど出てこない。そのため主として、先の場合と同様に、山下英一氏『グリフィスと福井』（増補改訂版）[4]の中の「グリフィス日記」（一八七一年三月一日～一八七二年一月二二日）と日記の内容を補完す

る福井滞在中の書簡をまとめた『グリフィス福井書簡』[5]の英文翻刻とその日本語訳を使わせて頂いた。そして、日記の内容から学生と推定できる人物と今回のメモの人物とが同姓であることなどをもとに同定の決め手とした。しかし、メモには約五〇人の姓あるいは呼び名が記されているが、日記には何も記されていない人物も多数いる。それらの内で日記以外の資料で推定出来たのは四、五人で、現在のところ同定できたのは推定も含めて約二〇名である。なお、このメモに「肥後」と記されている人物については同定していない。

本稿では「一　自筆メモについて」でメモの作成時期について考察した。「二　メモの学生の同定」ではメモにある姓をもとに、日記や別の史料を用いて学生の同定を行った。「三　メモに記されていない学生たち」では「a　日記から学生と分かるがメモにその姓がない人物」と「b　昭和二年グリフィス夫妻の来日の際、再会した人物名」なども参考のために記した。

同定出来た人物について　グリフィスとその人物の当時の関係を知るために、日記にどのように記されているか、いつグリフィスを追いかけて東京へ行ったかなど、グリフィスの東京滞在中の東京日記[6]などにより分かる範囲で記した。しかし、グリフィスの帰国後その人物がどのような生涯を送ったかについては別の機会に報告する予定である。

一　自筆メモについて

自筆メモは三枚の用紙に記されており、図にその最初の一枚を示す。図から分かるように雑誌に挟まれたような状態で見出された。メモは恐らく藩（県）から学生名簿の提出を求められたための草稿である可能性が高いと考えている。またメモが作られた時期であるが、福井日記の一八七二年一月一一日に「学校へ出す学生の名簿を書いた」とあることから、この時の草稿ではないかと考えて、それを裏付けるために、このメモに出ている人物と福井日記中の人物でグリフィスが東京へ出る以前に横浜や江戸に行くなどと言って、グリフィスに別れの挨拶に来た学生を調べてみた。

以下に　学生がグリフィスに別れの挨拶に来た日付とその人物の姓を記す。

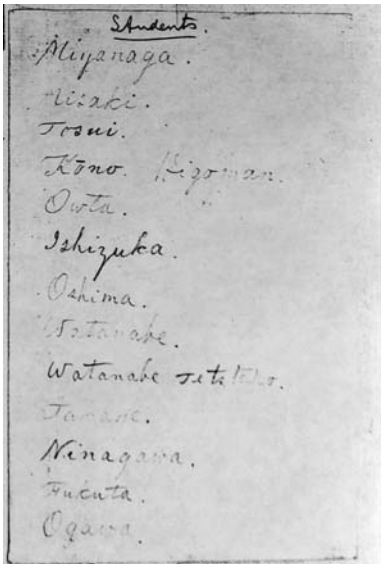

図　グリフィスの残したメモ（Students）

表　グリフィスのメモ（学生名簿）

番号	Student name	学生名	年齢	日記回数	新居同居日	福井出東京着日
1	Miyanaga	宮永 典常	30	9		
2	Misaki	三崎 玉枝	20	10		
3	Tosui	今立 吐酔	15	10	1871.10.19	1874.2. 頃出
4	Kono (Higoman)					
5	Owta (Hgoman)					
6	Ishizuka	石塚 左玄	20	1		1872.1.15 頃出
7	Oshima	大島 淑	20 位	2		同上
8	Watanabe					
9	Watanabe Tetsutaro					
10	Takase					
11	Ninagawa					
12	Fukuta					
13	Ogawa					
14	Kaw-kenji					
15	Itagakidera					
16	Awoki	青木 宇佐美	20 位	3		
17	Honda	本多 貴一	21	6	1871.9.26	
18	Towgo	東郷 六郎	14 位	1		
19	Karl	笠原 格	13	16	1871.10.25	1872.5.1 着
20	Mitswoka	三岡 丈夫	14	0		1872.2. 頃出
21	Hayashi					
22	Sasaki	佐々木 忠次郎	14	9		1872.6.22 着
23	Kai?u???					
24	Motoyama. Small Higo					
25	Johan	ヨハン	14 位	8	1871.10.20	
26	Hirase two brathers	平瀬 作五郎	15	0		
26		平瀬 再五郎	14	0		
27	Otani	大谷 外蔵	14 位	0		1872.4.12 着
28	Inowuye　Tom	井上 敬二	14 位	0		
29	Teda					
30	Miura	三浦	14 位	2		
31	John	ジョン	14 位	1		
32	Asano					
33	Machimura					
34	Ishida	石田 二男雄	14	2	1871.12.21	1872.4.9 着
35	Sasaki nawoichi	佐々木 直一	13	0		
36	Inouye german scholor					
37	Nakazawa	中沢 岩太	13	1		1872.1.22 出
38	Kobayashi	小林 寿	14 位	0		
39	Ioshida					
40	Honda Shiroshi					
41	Uriu					
42	Tsuge					
43	Toyoda					
44	Saida					
45	Yamaguchi					
46	Nagasaki					
47	Hara					
48	Osaki					
49	Takahashi					
50	Yamanouchi					
51	Sasaki					

日付	人物の姓
一八七一年五月一七日	木滑
七月一四日	木下
九月　二日	大島
九月一〇日	松原、粕谷、牧田、出村、野村
一八七二年一月一二日	片岡、山田
一月一五日	大島、石塚

（山下の福井日記に記された人名をそのまま記した）

ここで、大島姓が二人いるが　先の大島について日記では「大島がさようならを言いに来た。大学南校で一年間勉強するために東京に行くからである」とあり、後者とは別人であると思われる。

後述のメモに出てくる人物と比べてみると、一月一五日の大島と石塚を除く、すべての人物の名前はメモにはない。なお、一月一二日の二人の名前もメモになくてもよいと考えられるが、この草稿を書く時点で二人が東京に行くこと知っていたとも考えられる。それは、この日、片岡に静岡のクラークへの手紙を渡していることが日記に記されており、前もって手紙を用意していたと思われるためである。

以上のことより、このメモが作られたのは一八七二年の一月上旬であると考えられる。

二　メモの学生の同定

学生の同定のため、メモに記されている順に筆者が番号付けして作成したのが**表**である。

この表では、同定に取り上げた人物は、その人物のメモに書かれた翻刻、同定出来た場合は日本名、年齢（一八七一年における満年齢）、日記に出てくる場合はその回数、新居に同居した日付、そして東京に行った日付（福井出：福井日記による）東京着の日付（東京着：東京日記による）を分かる範囲で記した。即ち、英文のみしか記されていない学生は現在同定が出来ていない人である。

なお、日記に五回以上出てきて　すでに先の「福井人の同定」で同定されている学生については、その旨を記して簡略化している。なお、日記に出てくる場合には、全ての学生について、グリフィスとの当時の関連を知るために日記の内容を記すことにした。

以下に同定が出来た学生について表の番号順に記す。

(1) 宮永

この学生は、日記に九回出てきており、すでに「福井人の同定」で宮永典常と同定した。日記に見られる　宮永に関する日付とその内容を以下に記す。

①一八七一年　九月　六日　宮永と三人の少年に二時から四時まで教えた。

②一八七一年一〇月　四日　午後、宮永と四人の少年に教えた。

③一八七一年一一月二八日　通訳に本多と宮永が選ばれた。

④一八七一年一二月　九日　夕食後、九時まで宮永、三崎、青木、大島がドイツ語化学を読んだ。

⑤一八七二年　一月　二日　夕食後、有機授業その後宮永とキリス

ト教について長いこと話をしておもしろかった。

⑥一八七二年　一月　三日　夜、三崎と宮永とドイツ語を読んだ。

⑦一八七二年　一月一〇日　夜、宮永と三崎が遊びに来た。江戸に行くことについて九時半まで彼らと話した。

⑧一八七二年　一月一四日　桑原と宮永が訪ねて来た。

⑨一八七二年　一月一八日　夜、宮永が訪ねて来た。

上記の日記の内容と先の表に記した宮永の年齢などから両者の関係を考える。宮永の年齢はグリフィスより年上であり、日記の③では通訳（翻訳方）に選ばれていて、明らかに通常の明新館の中学生とは異なる。しかし、グリフィスが宮永を学生としてここに記しているのは、グリフィスの次の学生に関する事から裏付けられる。すなわち、私の学生は「数年も蘭書を易々と読んでいる有望な外科医から髷を結った快活な目の一四歳の生徒まで…」[7]と記している。ここで言う有望な外科医は、緒方洪庵の適塾、その後長崎でポンペから医学を学んでおり、ドイツ語もすこし読めた宮永典常を指すと考えて間違いない。

宮永は、「福井人の同定」の宮永の項で記したように、明治三年一二月には明新館の準二等教授になっており、日記の①②は午後に宮永の教え子である少年たちと特別にグリフィスに英語か化学などを習ったと考えられる。③はグリフィスの講義録をつくるための翻訳方に任命されたことを指しているが、その任はすぐに門野に変わったことが知られている。④以降は二つのカテゴリに分けられる。一つは④⑥で、ドイツ語の本をドイツ語で輪講形式で読んでいたことをうかがわせる。二つ目は⑤⑦⑨で、宮永がグリフィスの話し相手をしていたことをうかがわせる。これは三岡八郎、橋本綱維、佐々木権六といった人達が廃藩置県後に東京に出て行き、グリフィスがよく家を訪ねていろいろなことを語りあった人達がいなくなり、その代わりとして宮永が話し相手をしていたことをうかがわせる。

以上のことから、宮永はグリフィスより二歳年上でもあり、単なる先生と生徒というより、お互いに認めあったより緊密な関係にあったと思われる。

（2）三崎

日記中の三崎については一〇回出ていることから、「福井人の同定」での三崎玉枝との同定している。その詳細は筆者が「グリフィスの福井日記の“Misaki”（三崎）は誰か？」[3]という論考で、従来、三崎嘯輔（宗玄）と言われていたが、三崎玉枝（第一四代三崎玉雲）の可能性が高いことを報告した。その結果、メモの三崎も三崎玉枝であると考えている。日記にみられる三崎に関する日付とその内容を以下に記す。

①一八七一年　五月　八日　今日、三崎についてドイツ語を勉強する少年を一五人選んだ

②一八七一年一二月　九日　夕食後、宮永、三崎、青木、大島がドイツ語化学を読んだ。

③一八七一年一二月一八日　三崎とドイツ語を読んだ。

④一八七一年一二月一九日　三崎と四時から五時までドイツ語を読んだ。
⑤一八七一年一二月二〇日　三崎、青木とドイツ語を読んだ。
⑥一八七一年一二月三〇日　岩淵、三崎、少年達が階下で火鉢を囲んで楽しそう。
⑦一八七二年　一月　三日　夜、三崎と宮永とドイツ語を読んだ。
⑧一八七二年　一月　六日　夜、青木と三崎と一緒にドイツ有機化学を読んだ。
⑨一八七二年　一月一〇日　宮永と三崎が遊びに来た。
⑩一八七二年　一月一九日　三崎から非常に美しい模様紙をもらった。

この日記の内容で①の五月八日だけが、少年にドイツ語を教えるという教師という内容で、それ以後にその内容に関するものはない。しかし、姉のマーガレット宛ての手紙（七月二二日付）の中で「三崎が教えている一五人のぼくの少年はみな優秀だ」と記し、五月以降も三崎が少年にドイツ語を教えていたことは分かる。

一方、約七カ月後の②の一二月九日以降、⑩の一月一九日までの九回の内で、三回（⑥⑨⑩）を除いてすべてドイツ語を読むという内容である。これは一二月一日の日記に「荷物の中にドイツ語の本が入っていた」とあることから、この時に本格的なドイツ語の化学書が入手できたので、それらの本を読むことにしたためと思われる。そして、一緒に読んだ人達は、姉のマーガレット宛ての手紙（三月二六日付）で「医学生の六人の組に週三回ドイツ語を教える」と記していることから、以前からグリフィスにドイツ語を習っていた人達で、医学や薬学など医学関係者であると思われる。先に記した医者である宮永が居ることも納得できる。

なお、①の関係で、三崎玉枝がドイツ語を誰に何時習ったかということであるが、この点に関して三崎家の方に問い合わせをしたが、玉枝がドイツ語を習ったことが分かるような史料は現在当家には残されていないとのことであった。

一つの可能性として、上記の玉枝が六人の医学生の内の一人で、まだ若くてグリフィスの手伝いを出来る立場にいたのでないかと思われるが、断定は出来ない。しかし、表から分かるように、玉枝は当時二〇歳であり、まだ三崎家の当主を継いではいないし、グリフィスは教え子の中から助手的な人を選んでいるから。上記の可能性が考えられる。グリフィスと玉枝の関係は単なる先生と学生というよりむしろ助手的な関係でなかったかと思われる。

（3）トスイ（今立吐酔）

トスイの名は日記に一〇回出てきている。そこで「福井人の同定」の今立吐酔の項で、すでにトスイが今立吐酔であることを同定している。日記に見られるトスイをみることにする。

①一八七一年一〇月一三日　吐酔が僧の職をやめて　私の家に来ることになった。
②一八七一年一〇月一九日　今日から吐酔が　私の家に住むためにやってきた
③一八七一年一〇月二二日　大岩、吐酔、中野とマタイ伝五章を読

んだ。

④一八七一年一〇月二五日　中野、大岩、吐酔、岩淵と佐々木の家に行った。

⑤一八七一年一〇月二九日　カール、吐酔、大岩、中野とマタイ伝六章を読んだ。

⑥一八七一年一一月二六日　吐酔が里帰りした

⑦一八七一年一二月一〇日　吐酔、大岩、肥後と『新約聖書』を読む。

⑧一八七一年一二月二四日　中野、吐酔、大岩とイエスのたとえ話を読んだ。

⑨一八七二年　一月　七日　中野、大岩、吐酔と大きな寺へ行った。

⑩一八七二年　一月一四日　吐酔は里帰り。

吐酔の名が日記にみられるのは、上記の一〇回であるが、グリフィスが吐酔に対して、この日記の①の内容からそれ以前に僧をやめて、グリフィスの新居が出来た時には同居するように話していたことが分かる。

このことは、姉マーガレット宛ての手紙（一八七一年一〇月二八日付）「…もう一つの部屋に笠原（カールと呼ぶ）、本山、吐酔が居る。…吐酔は驚くほど頭のいいわずか一五歳の少女のようにおとなしくダイヤのように輝く美しい少年だ。吐酔は仏語、英語、化学を学んでいて、ぼくが前に教えていた仏語の組の少年を教える。僧職にあったが辞めるようにとの懇願に、長い間否定の返事をしていたが、ついに金刺繍の襟を外しクレープの長い法衣をたたんで僧職を断念した」と記している。

それ以後の内容も、キリスト関係のものが大部分である。グリフィスはその能力の高さも非常に買っているが、それ以上にキリスト教の伝道という点から、僧籍にある吐酔をキリスト教に改宗させたいという気持ちが強かったように感じられる。

吐酔がグリフィスの米国帰国時に同行したことや、そこでも改宗の問題がこじれてグリフィスに学費の援助を打ち切られたことなどが知られているが、その原因となるグリフィスと吐酔の思いの違いは福井時代からあったように思われる。すなわち、グリフィスは吐酔が改宗したと思っていたが、吐酔にはその意思は生涯なかったと思われることである。

（6）石塚

日記に石塚の名が出てくるのは一回だけである。そこには以下のように記されている。

①一八七二年　一月一五日　大島と石塚が近く江戸へ行くので、化学所の授業が小人数になった。

すなわち、グリフィスが東京に移る前に、この二人の学生は東京に出掛けたことがわかる。

石塚については『食育の祖　石塚左玄物語』[8]という伝記があり、その中に左玄の主要略歴が記されている。そこに「明治四年（一八七一）泉病院、診察方調合方勤務、グリフィスに学ぶ」とあり、同書の本文で「左玄は昼間は病院で働き、夜はグリフィスを訪ねて、保健学や化学を習っています。…グリフィスが南校の教授になるやグリフィスの助手として働いています」とある。なお、『福井県医

学史』の明治四年の「病院班次」[9]によると、石塚が泉病院で診察方、調合方上組とあることは確認された。また、東京日記の一八七二年四月二四日に「石塚に英語を教え始める」ということも記されている。以上の事から、このメモの石塚は石塚左玄と同定した。

なお、石塚は職業についており、表から分かるように年齢も二〇歳と高く、先の宮永や三崎などと同様に医学関係の一人としてグリフィスと接していたと思われる。しかし、日記には上記の一回しか名がなく、二人の交流関係は日記からだけではよく分からない。

(7) 大島

日記には、大島姓は二回しか出ていないので同定が必要である。

①一八七一年一二月　九日　宮永、三崎、青木、大島がドイツ語化学を読んだ。

②一八七二年　一月一五日　大島と石塚が近く江戸に行く、化学所の授業は少人数になった。

②は先の石塚と同じである。このことから両者の関係を調べたところ、明治四年の「病院班次」を見ると、大島も泉病院の「診察方、調合方手伝い下級」とある。すなわち、二人は同じ病院に勤め、石塚が大島の上司という関係にあることがはっきりした。そのため二人が一緒に上京しようと考えてもおかしくないと思われる。

さらに日記の①に記されている四人の内、青木を除く三人は、筆者が「グリフィスの福井日記の 'Misaki（三崎）' は誰か?」の中で記した、グリフィスの手帳の裏表紙の裏にフルネームが記されている人物中で、宮永は宮永典常、三崎は三崎玉枝であることなどから、大島は大島淑（きよし）であると同定した。大島も医学関係者の一人としてグリフィスと接していたと思われる。

(16) 青木

青木という姓は日記に三回しか出ないので、同定が必要である。

①一八七一年一二月　九日　夕食後、宮永　三崎、青木、大島がドイツ語化学を読んだ。

②一八七一年一二月二〇日　三崎、青木とドイツ語を読んだ。

③一八七二年　一月　六日　夜、青木と三崎と一緒にドイツ有機化学を読んだ。

いずれも三崎と一緒にドイツ語を読んでいる。このことから、青木も三崎や大島などと同じ医学関係者ではないかと思われるが、姓だけで名の方はどこにも出ていない。明治四年の「病院班次」を見ると「旭病院　調合　中級　青木宇佐美」という名前を見出した。三崎は「病院班次」に名前はないが、『子弟輩』（松平文庫九二二）に「玉樹養子三崎玉枝、一八歳、明治三年調合方手伝い」とあり、どこの病院かは分からないが調合方手伝いをしていたことがはっきりしている。三崎は明治四年にはグリフィスの手伝いをすることもあり、病院の調合手伝いをやめたのかもしれないが、「病院班次」には玉枝の名前はどこにも無い。

上記のように、大島も病院は違うが調合方であることなどからこれらの人達は知り合いで、一緒にグリフィスにドイツ語を習っていてもおかしくない。そのため青木は、この青木宇佐美である可能性が高いと思っている。しかし、姓だけで名の方がどこにも出てい

ないし、年齢も分からないので断定はできない。

(17) 本多

本多姓の人物は、福井日記中に三人いることは「福井人の同定」に記した。すなわち、本多修理、本多貴一と本多鼎介である。このうち修理は貴一の父親であり、鼎介は姉マーガレット宛て（一八七一年一二月三日頃）の手紙で「日本語の慣用語句、語源を専門にしていることで有名で、外国語の科学用語をそれに相当する能力があるそうだ」と記して、講義の日本語訳を作るための通訳（翻訳方）に宮永と一緒に選ばれたことを伝えている。年齢も三〇歳であり、日本語の専門家という事で、グリフィスの学生とは考えにくい。残りの一人である貴一（勝三郎）は後述するように、グリフィスの新居に同居をしており、学生とグリフィスが言う本多は本多貴一と同定した。貴一は日記には六回出てくる。

①一八七一年八月二八日　午後、東京から本多が帰ってきて遊びに来た。

②一八七一年九月二四日　九時から一二時まで本多と散歩をした。

③一八七一年九月二六日　今日、本多が来た（新居に同居）。

④一八七一年九月二七日　大岩、中野、本多と化学の本を読んだ。

⑤一八七二年一月一三日　本多と化学所に行き、マッチの作り方を教えた。

⑥一八七二年一月二二日　佐々木、岩淵、本多らが府中まで同行した。

明治二年、貴一は沼津兵学校に出掛け、翌年から東京でフルベッキについて英語を学んでいて、①八月二八日に福井に帰り、③九月二六日から新居に同居したことがわかる。そして、学生ではあるが、経歴などから、新居では大岩、中野と同室しており、⑤のマッチの作りを教えたりしていることから、助手的な役割を担っていたように思われる。

なお、日記からは、貴一は同居していたにも関わらず、グリフィスが新居で日曜に行っていた聖書を読んだり、讃美歌を歌うというようなキリスト関係の集まりには出ていなかったものと思われる。

(18) 東郷

日記中に東郷という姓がでてくるのは、一回であり、同定が必要である。

①一八七一年一〇月一三日　東郷少年が夕食に来た。

東郷に関しては姉マーガレット宛ての手紙にも何も記されてない。そのため、東郷の同定は難しいが以下のように考えた。

日記の三月九日のところで、山下は佐々木の息子（佐々木忠次郎）の注に「春嶽から明治二年語学伝習生の辞令を受けた」とし、一緒に学んだものとして、松原多久馬、笠原格、東郷六郎、大谷外蔵、石田二男雄、三岡丈夫、井上敬二をあげ、いずれもみなグリフィスの生徒になったと記している。この内の松原を除き、すべて姓が学生名簿に出てくること、またこの時これらの人達は少年と呼ばれる年齢であったと考えられる。以上のことより、日記に出てくる東郷少年と学生名簿にある「Towgo」は同一人物であり、東郷六郎である可能性が高いと考えているが、断定はできない。

(19) カール（笠原）

カールという呼び名は日記に一六回出てきており、「福井人の同定」のカール（笠原）の項で、笠原格（笠原白翁の四男）であることを同定した。ここでは日記におけるグリフィスとカールの関係を見ることにする。

①一八七一年　七月　一日　山田、カール、ヨハンが私の部屋にきた。
②一八七一年　七月　二日　カールと彼の妹と大谷の子供が遊びに来た。
③一八七一年　七月一四日　午後、カールと佐々木に教えた。
④一八七一年　七月一六日　朝、カールと妹たちが訪ねて来た。
⑤一八七一年　七月三〇日　カールと妹たちが遊びに来た。かわいい三人姉妹。
⑥一八七一年　八月一四日　カールと佐々木に教えた。
⑦一八七一年　八月二〇日　朝、カールと妹たちが遊びに来た。
⑧一八七一年　九月一〇日　朝、カールと妹たちが遊びに来た。
⑨一八七一年一〇月　四日　夜、カールが一緒にいた。
⑩一八七一年一〇月一二日　午後、カールと散歩をした。
⑪一八七一年一〇月二五日　カールが今日から私の家に住むために来た。
⑫一八七一年一〇月二九日　カール、吐酔、大岩、中野とマタイ伝六章を読む。
⑬一八七一年一一月二六日　日暮れにカールと古城まで散歩をした。
⑭一八七一年一二月一〇日　カール、吐酔、本山と讃美歌百三と百四番を歌った。
⑮一八七二年　一月　六日　授業の後、カールと三浦と長いこと散歩をした。
⑯一八七一年　一月一二日　夜、カール、石田、ジョンと相撲をとり、私が勝。

カールの妹たちとあるのは、「福井人の同定」に記したように、兄である浜人の娘であるが、グリフィスはカールの妹と思っていたので、そのように記したと考えられる。カールの家（笠原白翁の家）は当時浜町にあり、グリフィスの旧邸に近いので、カールはいとこ達をつれて遊びに行っているほほえましい光景が読み取れる。③と⑥にある佐々木は佐々木忠次郎で、放課後に一緒に英語をならっていたこと指す。ただし、カールが新居に同居してからは、いとこ達が新居を訪ねることはなくなっており、日曜日にはキリスト教関係のことにも参加していたことが分かる。

なお、東京で撮られたグリフィスと福井時代の生徒たちの写真の裏にあるカールの注には「Carl, my pet, Now Kasahara of Kobe, 1917」とあり、福井滞在時のグリフィスがカールを非常に可愛がっていたことがわかる。

(20) 三岡

グリフィスの福井日記中で三岡の姓は一六回出てくるが、「福井人の同定」ですべて三岡八郎（由利公正）であると記した。よって日記中の三岡は、グリフィスの学生ではないと言える。

しかし、三岡八郎の長男に三岡丈夫がいる。丈夫は（18）の東郷の項で述べたように、佐々木忠次郎らと一緒に明治二年春獄より語学伝習生に任命されており、グリフィスの生徒と考えてよい。日記には名前が出てこないが、姉のマーガレット宛ての手紙（一八七一年四月二八日付）に「僕は三岡さんの若い息子をジョーンズと名付けて呼ぶ」とあり、三岡の家にも何度も行っており丈夫とも会っていたことも分かっている。

また、三岡八郎が新政府に呼び出されて東京に行く時、同行していないことははっきりしている。すなわち、丈夫が父親のいる東京に向けて福井を出たのは、「士族」（松平文庫九二一）の丈夫の項に「明治五年二月二日（一八七二年三月一〇日）に父親のいる東京に出立」とあり、またグリフィスの東京日記（一八七二年五月一一日）に「若い三岡が私に会いに訪ねて来た、井上が同行」とある。なお、井上は後述する（28）の伝習生の一人である井上敬二と思われる。

すなわち、若い三岡は丈夫を指すことは間違いない。丈夫が福井を離れたのは一八七二年の三月であるので、このメモが先に記したように一八七二年の一月上旬記されたとすると、この三岡の名前が丈夫だと考えておかしくない。以上のことより、この三岡は丈夫と同定した。

（22）佐々木

このグリフィスのメモの表には佐々木姓は（22）、（35）、（51）の三か所に登場し、三人の学生がいたことになる。この内の（35）はフルネームで「Sasaki nawoichi」と記されており、後述するように佐々木直一（後の曠）のことである。しかし、他の二人は姓だけであり断定は難しいが、その内の一人は佐々木忠次郎の可能性がある。

忠次郎については、「福井人の同定」に記したように、佐々木権六の息子であり、日記にもたびたび出てくる人物で、グリフィスの学生であったことは確かである。しかし「福井人の同定」でも記したように、伝記『佐々木忠次郎博士』[10]の略年表にあるように、忠次郎は明治四年九月に父親の権六に工部省より出仕の依頼があり、その時一家で東京に移住したとされている。そして、筆者もまた「福井人の同定」ではそのように記した。そうすると、このメモが書かれたと推定した一八七二年一月上旬には福井におらず、メモに名前があるのはおかしいということになる。

しかしながら、グリフィスの東京日記の一八七二年六月二二日には「佐々木忠次郎が福井から着いた」と記されていることを見つけた。これに従うと、先に記した三岡丈夫の場合と同様、父親への依頼が急であったこともあり、実際に一家で一緒に東京に出たのではなく、遅れて忠次郎たちが東京に出たと考えると、メモに姓があってもおかしくはないことになる。それを裏付けると思われるものがある。壬申の戸籍調に基づく『幕末維新福井名流戸籍調』[11]の佐々木権六の項を見ると、住所は「足羽県足羽郡第一区神楽町組　神明前町」とあり、この時点での住所は福井にある。一方、先の三岡丈夫の項では「壬申二月東京府　父公正方寄留」とある。このことは、佐々木権六が東京に呼び出された時に一家で東京に移り移り住んだので

なく、一家の移住は明治五年だったと考えられる。

現在、筆者は上記のことより、忠次郎は一八七二年一月上旬に福井に居たと考えている。また、(22) の佐々木は、表から分かるように近くの番号に明治二年に春嶽によって語学伝習生の辞令を受けた者が多いことなどから、佐々木忠次郎の可能性が高いと考えている。

なお、最後の番号の佐々木について、現在のところ全く分かっていない。

ここでは、(22) は佐々木忠次郎と考え、グリフィスと忠次郎の交遊関係を福井日記の中に見ることにする。佐々木忠次郎は福井日記の中に九回出てくる事は「福井人の同定」に記してある。

①一八七一年　三月　九日　夕方、佐々木の息子に教えた・
②一八七一年　三月二九日　夜、佐々木の息子らと…
③一八七一年　五月三一日　夜、佐々木と五人の学生に化学を教えた。
④一八七一年　六月　八日　佐々木の息子に五時から六時まで教えた。
⑤一八七一年　六月一五日　佐々木の息子に教えた。
⑥一八七一年　七月一四日　午後、カールと佐々木に教えた。
⑦一八七一年　八月一四日　午後、カールと佐々木に教えた。
⑧一八七一年　九月　四日　佐々木とヨハンに教えた。
⑨一八七一年一〇月二六日　佐々木（忠次郎）の代わりをする。

以上が「福井人の同定」の佐々木の項で、忠次郎に同定した九回である。ただし、③は権六と忠次郎のどちらかは分からないとした。なぜならこの時は夜であり、佐々木は五人の学生に化学を教えたということで、忠次郎よりも権六の可能性が高いと考えたが、断定できず、人物は二人の名を記した。

⑨の英文には、中野と大岩が化学科の助手に任命された、佐々木の代わりとあるが「(忠次郎)」とは記されていない。これは山下が注の意味で日本語訳にする際に記したと考えられる。しかし、この日以前に忠次郎が助手をしていたことは全くどこにも記されていない。中野や大岩の任命はこの日であるが、それ以前から助手的な役割をしていたことは九月一一日の日記に「大岩と中野が今日から教え始めた」とある事などからわかり、この段階で忠次郎に代わって中野や大岩が助手になったとは考えにくい。そしてこの佐々木は誰かということであるが、日記の九月一三日に「図画を始めた、佐々木氏と中野が手伝った」とあることから、橋本左内の肖像画を描くなど絵画の才能も高かった権六である可能性が高く、一〇月二六日の佐々木は忠次郎でなく権六と訂正する方がよいと現在は考えている。

また、姉のマーガレット宛ての手紙（一八七一年四月二八日付）で「週四日、毎晩、佐々木さんの男の子を教える。覚えが早い」とある。これが何時まで続いたかはかわらないが、家庭教師的なものである。日記や手紙から見られる、グリフィスと忠次郎の関係は個人的に恐らく英語を習っていたことを伺わせるが、吐酔やカールなどのようにグリフィスと親しく交際していた様子は伺えない。

(25) ヨハン

このメモでは「Johan」となっているが、日記では「Johann」となっ

ている。カールについても大部分は「Karl」であるが、時には「Carl」と記してあり、これも同じようにグリフィスがnを書き落としたと考えられ、同一人物と考えた。

ヨハンは、山下の『グリフィスと福井（増補改訂版）』の人名索引では「中沢岩太郎（ヨハン）」となっている。しかし「福井人の同定」で記したように、グリフィスは中沢岩太（岩太郎）のことをカスパーと呼んでおり、ヨハンとは別人であることは明らかである。

ヨハンについては現在のところ誰であるかは同定できていないが、日記には山下の本文の注を含めると八回その名が出てくるので無視できない。以下に日記にどのように記されているか見ることにする。

①一八七一年　七月　一日　山田、カール、ヨハンが私の部屋に来た。
②一八七一年　七月　二日　ヨハンとフランス語の生徒が来た。
③一八七一年　八月　六日　午後、ヨハンと散歩した。
④一八七一年　九月　四日　午後、佐々木とヨハンに教えた。
⑤一八七一年一〇月　五日　ヨハンが夕食に来た。
⑥一八七一年一〇月二〇日　ヨハンが私の家で住むたかめにやって来た。
⑦一八七一年一一月一〇日　ヨハンが今日から一週間か一〇日住むために来た。
⑧一八七二年　一月一二日　カール、石田、ジョン（ヨハンか）と相撲をとった。

⑧の「（ヨハンか）」は山下が付けた注で英文日記には無い。英文では「Symotori with Carl, Ishida & John」とあるだけである。メモの（31）に「John」という呼び名が記されていることから、ヨハンとは別にグリフィスがジョンと呼んでいた人物がいたことは確かで、この注は誤りであると思われる。

なお、現在のところジョンという呼び名の人物が誰かということも分かっていない。ヨハンについては、姉のマーガレット宛ての書簡には何も記されていない。

上記の日記の内容や、ヨハンの両親がグリフィス家を訪ねていたことが日記より分かる。ヨハンは佐々木忠次郎やカールとほぼ同年齢位の少年で、一時期は新居に同居していたことや、東京日記にヨハンの名前が見いだせないことなどから、グリフィスを追って東京へ行くことはなかった人物であることは分かる。しかし、誰かという同定はできていない。

(26) 平瀬兄弟

平瀬兄弟については、福井日記や姉のマーガレット宛ての書簡にも一度もその名前はない。しかし、平瀬姓の人物として平瀬作五郎がイチョウの精子の発見者としてよく知られており、「平瀬作五郎伝」[12]などで、明治四年には明新館の中学校にいたことがはっきりしており、『近代日本美術教育の研究　明治時代』[13]には「グリフィスの弟子で図画教師になった人は、小林寿、平瀬作五郎がいる」とある。さらに『福井名流戸籍調』[11]の平瀬作五郎の項を見ると、作五郎は平瀬儀作の長男であり、一歳年下に次男に再五郎がいることが分

かった。これらのことから、平瀬兄弟は、平瀬作五郎と再五郎と同定した。しかし、グリフィスとの当時の交流については日記にも名前が一度も出ていないので全く分からない。グリフィスが図画を教えていたことは確かであるので、上記のようにグリフィスに図画を習ったことは確かだろうと思われる。

(27) 大谷

日記中に大谷の姓は七回出てくるが「福井人の同定」に記したように、この大谷は当時藩の権少参事であった大谷遜であり、学生でないことははっきりしている。したがって、このメモの大谷は別人であることは確かである。

学生の大谷として最も可能性があると思われる人物は、明治二年に佐々木忠次郎らと一緒に、春嶽によって語学伝習生に任命された七人の内にその名前がある大谷外蔵である。なお、大谷の名前は東京日記の五月一二日に「東京に着いた」ことが記されていて、これも同一人物ではないかと推定される。これらから、メモに書かれている大谷は大谷外蔵であると推定しているが、断定はできない。

日記や姉のマーガレットの書簡にも、この大谷については全く触れられていないので、グリフィスとの交遊関係などは分からない。

(28) 井上（トム）

日記中に井上は一三回出てくる。大谷の場合と同様、「福井人の同定」に記したように、この井上はすべて当時福井藩御雇教師警衛勤をしており、グリフィスが東京に戻るときに同行し、英学修行のために上京した井上穆（剛太郎）であることは、日記の内容から判断して間違いないと考えられる。

メモの井上であるが、この人物もやはり大谷と同様に、春嶽により語学伝習生の任命を受けた井上敬二ではないかと推定した。なお井上の名は先に三岡の所で述べたように、東京日記（一八七二年五月一一日）に「若い三岡が私に会い訪ねて来た、井上が同行」とある。この三岡は上述の語学伝習生の一人である三岡丈夫であることは確かであり、この井上は敬二と考えておかしくないと思っている。なお、このことから井上も五月一一日以前に東京に出てきたことは確かではないかと思われるが、いつ福井を出て、東京にいつ着いたかは、これでは分からないので、表には何も記していない。

(30) 三浦

三浦という名前は、日記の一八七一年一二月三一日に「三浦と楽しい散歩をした」とあり、一八七二年一月六日に「学校で授業を三時間して楽しかった。その後、カールと三浦と長いこと散歩をした」とある。カールと一緒に散歩したという内容から考えて、三浦は学生の一人と考えて良いと思われるが、それ以上の資料が見つからず、名すら分からない状態である。

(31) John（ジョン）

ジョンという呼び名は、一八七二年一月一二日に後述の石田とともに「一一時、カール、石田、ジョンと相撲を取って私が勝った」という一度だけで、それ以外には全くこの呼び名が出てくる資料もない。そのため、この人物については名前の手掛かりもなく、よく分からない。

（34）石田

日記中に石田という姓が出てくるのは以下の二か所だけである。

①一八七一年一二月二一日　石田と湯村（Iumura）が明日から私の家に来る。

②一八七二年　一月一二日　一一時、カール、石田、ジョンと相撲を取って私が勝った。

しかし、表から分かるように、これ以外に東京日記の一八七二年四月九日に「中野、石田、山形が東京に着いた」と記されており、さらにグリフィスを囲んで写した六人福井の生徒たちの中にもその名がある。また、明治五年四月改の『南校一覧』[14]の学生名簿に「英八ノ部　足羽県　石田二男雄　一七歳」と記されている。この名簿には一緒に上京した思われる中野外志雄（英三ノ部）と写真にも写っている中沢岩太（独ノ三部）の名前もある。そして石田二男雄の名前は明治二年の春嶽より任命された語学伝習生の中にも見られる。これらのことから、石田は石田二男雄と同定した。

（35）佐々木直一

先に記したように、佐々木という姓の人物は三人記されているが、この人物に限り、メモにはっきりと姓名が記されている。それを手掛かりに『福井藩士履歴 三』の佐々木の項を調べたところ、「佐々木曠（直一）未一四歳」という人がいることが分かった。明治三年一二月一二日に「准二等医　但病院主務」に任命され、明治四年九月一七日に病死した佐々木一雄という医者の息子で、明治四年九月一七日に父の家督を相続している。年齢から見てもグリフィスの学生と考えておかしくないので、佐々木直一と同定した。なお、昭和二年にグリフィス夫妻が来福した際、グリフィスに感謝状を贈った人物の一人として佐々木曠（ひさし）の名前があり、同一人物と思われる。

（37）中沢

（25）のヨハンの項でも記したように、『グリフィスと福井（増補改訂版）』の索引では「中沢（ヨハン）」となっているが、グリフィスは中沢をカスパーと呼び、ヨハンとは別人である。なお、カスパーという呼び方は、福井日記には一八七二年一月二二日に一度だけ「中沢（カスパー）」とあるだけである。

中沢は日記にも一度だけ出てくる。すなわち一八七二年一月二二日に、中沢がグリフィスの東京行きに同行したことが記されている。この事実は、『中沢岩太博士喜寿祝賀記念貼』[15]の中に、この日、中沢がグリフィスと井上などに同行して東京に向かったということが記されており、確認できた。これらのことから、中沢は中沢岩太と同定した。

中沢は、グリフィスと福井の学生たちと写した写真や明治五年四月改の『南校一覧』の学生名簿に（独ノ三部）に入学した人物に中沢岩太の名前が見える。ただし、福井時代にグリフィスとどのような交流があったかは分からない。

（38）小林

グリフィスの日記には一度も出てこないが、（26）の平瀬作五郎の項にも記したように、『近代日本美術教育の研究　明治時代』の

中に「グリフィスの弟子で図画教師になった人は小林寿、平瀬作五郎である」と記されている。このことから、小林は小林寿であると同定出来ると思っている。

三　メモに出ていない学生たち

このメモに記されていない学生としては「（a）日記に記されているがメモに名前が無い人」、「（b）昭和二年グリフィス夫妻来日の際再会した門人」について分かる範囲でその名前と同定を行った。

（a）日記に記されているがメモに名前が無い人

（ア）グリフィスが福井を去る前に福井を離れ、日記にはグリフィスに別れの挨拶に来たと記されている人達

学生の姓と日付を以下に記す。

（一）木滑（一八七一年五月一七日）
（二）木下（一八七一年七月一四日）
（三）大島（一八七一年九月二日）
（四）粕谷・牧田・松原・野村・山村（一八七一年九月一〇日）
（五）片岡・山田（一八七二年一月一二日）
（六）大島・石塚（一八七二年一月一五日）

この内（六）の大島と石塚の姓はメモにあり、大島と石塚の項に先述したので、ここではメモの制作時期に関連するということだけ述べておく。残りの（一）から（五）までの一〇人の内、はっきり同定できたのは次の二人だけである。（一）の木滑と（四）の中にいる松原である。

（ア―①）木滑

木滑は一八七一年五月一七日の日記に「今日の午後、木滑が訪ねて来た。彼はアメリカ行きに選ばれた」とある。これに関して姉のマーガレット宛ての書簡（一八七一年五月一七日付）に「明治政府から…洋行する学生二名を推薦する権限をあたえる。…その内の一人は僕が最適と思う学生を挙げるように依頼された。…そこで木滑という名前の有能で謙虚な学生を選んだ」と記している。

この米国への留学生の木滑については、山下が日記の木滑についての注に詳しく記していて、木滑貫人（きなめりしらと）であることは、はっきりしている。そこで木滑は木滑貫人であると同定した。

（ア―②）松原

松原は一八七一年九月一〇日の日記に「粕谷、牧田、松原、野村、山村が別れの挨拶に来た。彼らは横浜に行く」とある。そしてこの人物が後に雨森姓となり、グリフィスの生徒であったことは山下「人間　雨森　信成（一）」「同（二）」[16]によって明らかにされている。特に「（一）」の「二　雨森の英文手紙」で、雨森がグリフィスに送った手紙（一九〇四年一二月二一日付）のなかで「私はあの頃の痩せていて、青白い顔の身体の弱そうな少年です。私は福井で先生の化学の講義を受けたり、先生の午後の散歩のお伴をいたしました。…あの頃の私は松原と呼ばれていました」と書いている。そして松原が福井を去る時には横浜に行くと言っており、横浜で雨森は宣教師ブラウンに習い、その後ワイコフが福井に赴任した時、通訳として

福井に帰っていることが知られていることなどから、この松原は後の雨森信成であると考えて間違いない。

なお、明治二年、春嶽が任命した八人の語学伝習生の中に松原多久馬なる人物がいる。この人物も雨森信成と同一人物かどうかであるが、語学伝習生の内で松原多久馬を除く人達は上述のようにすべてメモに出ているので、横浜に行った松原とこの伝習生が同一人物である可能性はある。しかし、この事を裏付ける史料が現在のところ見つからず断定は出来ない。

（イ）日記にはグリフィスの新居に同居したことが記されているがメモにはその姓が無い人たち

姓と新居に来た日を下記に記す。

（一）山形（一八七一年一二月一三日）

（二）（石田）、湯村（一八七一年一二月二一日）

（二）の内の（石田）は、メモの（34）に記した石田二男雄である。

なぜこの山形と湯村がメモに記されていないか、その理由は今のところ分からない。山形について以下のように同定したが、湯村について何も分かっていない。

（イ―①）山形

グリフィスが東京に行った後、山形は中野、石田と一緒に一八七二年四月一日にグリフィスを追って東京に着いたことが東京日記に記される。さらにグリフィスと福井の学生たちの写真に写っていて、グリフィスの学生であったことは確かである。

『宮城県医師会報』[17]の「宮城県医師会会長略伝（その一）　初代会長　山形仲芸」に「出生地　越前国足羽郡駕籠町で、安政四年（一八五六年）一一月一五日が誕生日で、明治五年、一六歳の時上京して、東京大学医学科に入り、医学を修行し、同一四年に卒業」とある。これは山形が福井県出身で、明治五年に上京したこととも一致しており、この人物と日記の山形は同一人物と考えた。

なお、これを裏付けるものとして、昭和二年グリフィス夫妻が来福した際に福井市役所が発行した『グリフィス博士』[18]の中に「当時博士の薫陶をうけて後に名を顕はしたる者」の一人として「仙台医学専門学校長医学博士　山形仲芸」とあり、先の略伝に明治三四年に仙台医学専門学校長となると記されており、仲芸が日記の山形と同一人物あること示している。

（b）昭和二年グリフィス夫妻が来日の際、再会した旧門人

ここでは日記などと関係はないが　昭和二年のグリフィス夫妻の来福に際して、グリフィスに感謝状を贈った福井旧門人の生存者名を参考のために記しておく。

勝山千百里、今立吐酔、今立源太郎、堀運平、恩田貞義、加藤千勝、田口虎之助、並木立弥、中沢弘恭、上阪重雄、佐久士重隆、佐々木曠、以上一二名である。[19]

この内でメモに名前があるのは、今立吐酔と最後の佐々木曠（メモでは佐々木直一）だけである。その他の人達は日記にもメモにも名前は無く、グリフィスとの関係はわかってはいない。なお、グリフィスのこの来日時、大阪でも同じような会があったが、今立吐酔を除いて福井関係者はいないことが分かっている。[20]東京での集まり

は佐々木忠次郎と仙石貢が幹事をしている。この参加者は開成学校時代の生徒たちであることは、その時に撮られた写真の人物の同定が若林文高によってなされており、[21] 佐々木忠次郎を除いて福井時代のグリフィスの生徒はいなかったようである。

おわりに

本稿では、主としてグリフィスの残した自筆メモの学生名簿にある学生の同定を試みた。しかし、学生であるため、福井藩関係の史料も乏しく、また福井日記に記載されたている学生はグリフィスのお気にいりの人物と医学関係者に偏っているためか、完全に同定できた学生は一五人弱であった。かなり不完全なものであるが、これを足掛かりとして今後もう少し充実出来ればと考えている。これらの学生ついて何かご存知の方は、ぜひご一報いただければ幸いである。

謝辞

グリフィスの残した学生名簿のメモが福井大学総合図書館のグリフィスコレクションに存在することをお教え下さり、さらに種々の史料の収集などいろいろ御世話になりました福井大学図書館の安野辰己氏、今回も福井藩関係の史料の翻刻や原稿の体裁などにご尽力くださいました福井県立図書館の長野栄俊氏、福井藩関係の史料の収集にご協力くださいました福井県文書館の方々に厚く御礼申し上げます。

註

(1) 沖久也「グリフィスの福井日記中の福井人の同定について」(『若越郷土研究』五九巻二号、二〇一五年、一一～二九頁)。
(2) 福井大学グリフィスコレクションSCRAP(二)。
(3) 沖久也「グリフィスの福井日記の“Misaki(三崎)”は誰か?」(『化学史研究』五〇巻一号、二〇一五、九～二〇頁)。
(4) 山下英一『グリフィスと福井(増補改訂版)』(エクシート、二〇一三年)。
(5) 山下英一『グリフィス福井書簡—Griffis Fukui Letter』(能登印刷出版、二〇〇九年)。
(6) 蔵原三雪「W.E.Griffis' Journal(1872/1/23-1873/3/25)」(『武蔵丘短期大学紀要』一二号、二〇〇四年、四九～七三頁)。
(7) 註(5)二〇四頁、参考(1)。
(8) 岩佐勢市『食育の祖　石塚左玄物語』(正食出版、二〇一〇年、七頁)。
(9) 福井県医師会『福井県医学史』(福井県医師会、一九六八年、七頁)。
(10) 『佐々木忠次郎博士』(佐々木忠次郎先生伝記編纂会、一九四〇年)。
(11) 石橋重吉編『幕末維新福井名流戸籍調』(福井市立図書館、一九四二年)。
(12) 小野勇「平瀬作五郎伝(一)」(『生物科学』三五巻二号、一九八三年、一〇五～一〇八頁)
(13) 金子一夫『近代日本美術教育の研究　明治時代』(中央公論美術出版、一九九二年、二三七頁)。
(14) 『南校一覧』(弘前図書館蔵)。
(15) 『中沢岩太博士博士喜寿祝賀会帖』(中沢岩太博士喜寿祝賀記念会、一九三五年)。
(16) 山下英一「人間雨森信成(一)」「同(二)」(『若越郷土研究』三三巻四号、三三巻五号、一九八八年)。

（17）玉手英典「宮城県医師会会長略伝（その一）」（『宮城県医師会報』三七七号、一九七七年、二三〇～二三二頁）。

（18）『グリフィス博士』（福井市役所、一九二七年）。

（19）『稿本福井市史 下（復刻版）』（歴史図書社、一九七三年、五二四頁）。

（20）この件については、この会に出席した平賀年美について調べられている川西市在住の戸田準氏より、その時写された記念写真のコピーを送り頂き、それに基づき確認した。なお、この会は昭和二年二月二五日大阪ホテルで開かれ、出席者はグリフィス夫妻を除いて十一名であった。

（21）若林文高「国立科学博物館所蔵の櫻井錠二資料」（『国立科学博物館研究報告 E類 理工学』三三号、二〇一〇年、二一～三五頁）。